

由農

地域を支える

農業人

WAZABITO

PROFILE

きむら さとみ

木村 里美 さん

KIMURA SATOMI

54歳

弥富市鎌島

未来へ繋げる 持続可能な農業

就農して15年目を迎える木村里美さんは、弥富市鎌島にある25アールの畑と水田でイチジク「榊井ドローフィン」を栽培しています。小さい頃から自然が大好きな木村さんは、実家のイチジクの栽培を手伝っていた経験をきっかけに就農しました。

就農してすぐに温暖化や天候不順などの影響による被害を受けた木村さんは、12年前に品質向上を目的に水田の一部をイチジク畑に改良し、水はけと水持ちの良いイチジクに適した水田での栽培を試みしました。また、畑の方では傾斜を利用して水分が保たれるように低地をイチジク畑に改良するとともに、畑と水田の両方で日当たりと風通しを考慮して畝の間隔を空けました。その結果、木村さんのイチジクの木には影がかからず、太陽光がよく当たるようになり、色が濃くみずみずしくて甘い果実を収穫できるようになりました。「見ただけで私のイチジクだと分かる」と言われることが誇りだそうです。

「畑にいる時間が一番の幸せ」と語る木村さんが何より大切にしているのは、品質管理です。虫や鳥の被害に対しても、傷んだ果実を丁寧に取除き、赤いネットや爆竹を使用して対応しています。「見て見ぬふりをせずに丁寧に向き合う、日々の積み重ねが大切です」と話します。

出荷を行う7月末から11月は午前5時頃から作業を始め、食べごろの柔らかさを見極めて赤紫色に色づいた果実を1つ1つ丁寧に収穫します。収穫したイチジクは、当JAの産直施設「愛菜耕房」や「菜々耕房」、「Aコープとびしま店」に出荷しています。消費者から「木村さんのイチジクだから」と選ばれることが、大きなやりがいにつながっているそうです。

「農業の魅力は自然と共に暮らし、学び続けられることです。続けていくためには、生産と販売の両立が大切です」と想いを語ります。「これからも自然と共に歩みながら、未来に繋がるイチジクづくりを進めていきます。10年後もその先も、美味しいイチジクを届けたいです」と笑顔で意気込みを語る木村さん。今ある環境を活かしながら挑戦し続け、次の10年に向けた畑づくりを進めています。

